第２節　コミュニティが生活復興感に与える影響

１　コミュニティに関する諸要因と生活復興感

(1)　４つの生活復興感指標

被災者の生活復興感を定量的に捉えるため、2001年に兵庫県が実施した「生活復興調査」を参考に、居住者調査における「震災前と比べた現在の生活に関する意識（問21）」や「こころやからだに実際に感じているストレス（問22）」「毎日のくらしなどに対する満足度（問23）」に関する設問の回答結果を分析することにより、現在の生活復興感を表す相対的な指標である「生活復興感指標」を作成し、コミュニティに関する諸要因との関係を明らかにした。

表６－１　問 21、22、23 の回答結果

問 21　現在の生活を震災前と比べると	かなり増えた	少し増えた	変わらない	少し減った	かなり減った	無回答	計 (%)
①自分のしていることに生きがいを感じることは	971 (5.7)	1,808 (10.6)	6,775 (39.6)	1,841 (10.8)	3,189 (18.7)	2,495 (14.6)	17,079 (100)
②日常生活を楽しく送ることは	986 (5.8)	2,123 (12.4)	6,247 (36.6)	2,253 (13.2)	2,856 (16.7)	2,614 (15.3)	17,079 (100)
③自分の将来は明るいと感じることは	579 (3.4)	1,149 (6.7)	5,774 (33.8)	2,281 (13.4)	4,564 (26.7)	2,732 (16.0)	17,079 (100)

問 22　最近一ヶ月の「こころやからだの状態」は	いつもあった	たびたびあった	たまにあった	まれにあった	まったくない	無回答	計 (%)
①気持ちが落ち着かない	1,853 (10.8)	2,308 (13.5)	4,420 (25.9)	2,444 (14.3)	3,224 (18.9)	2,830 (16.6)	17,079 (100)
②気分が沈む	1,746 (10.2)	2,575 (15.1)	4,233 (24.8)	2,659 (15.6)	3,006 (17.6)	2,860 (16.7)	17,079 (100)
③集中できない	1,589 (9.3)	2,264 (13.3)	4,120 (24.1)	2,622 (15.4)	3,266 (19.1)	3,218 (18.8)	17,079 (100)
④息切れがする	1,063 (6.2)	1,677 (9.8)	3,033 (17.8)	2,397 (14.0)	5,727 (33.6)	3,182 (18.6)	17,079 (100)
⑤胸がしめつけられるような痛みがある	747 (4.4)	1,075 (6.3)	2,374 (13.9)	2,169 (12.7)	7,402 (43.3)	3,312 (19.4)	17,079 (100)
⑥めまいがする	843 (4.9)	1,312 (7.7)	2,956 (17.3)	2,770 (16.2)	6,181 (36.2)	3,017 (17.7)	17,079 (100)

問 23　あなたの満足度は	大変満足	やや満足	どちらでもない	やや不満	大変不満	無回答	計 (%)
①毎日のくらしに	826 (4.8)	3,630 (21.3)	5,151 (30.2)	3,454 (20.2)	1,780 (10.4)	2,238 (13.1)	17,079 (100)
②ご自分の健康に	694 (4.1)	2,763 (16.2)	3,150 (18.4)	5,315 (31.2)	3,014 (17.6)	2,143 (12.5)	17,079 (100)
③今の人間関係に	964 (5.6)	3,402 (19.9)	6,041 (35.4)	2,711 (15.9)	1,535 (9.0)	2,426 (14.2)	17,079 (100)
④今の家計の状態に	340 (2.0)	1,617 (9.5)	3,560 (20.8)	4,500 (26.4)	4,495 (26.3)	2,567 (15.0)	17,079 (100)
⑤今の家庭生活に	934 (5.5)	3,069 (18.0)	5,207 (30.4)	3,223 (18.9)	1,863 (10.9)	2,783 (16.3)	17,079 (100)
⑥ご自分の仕事に	496 (2.9)	1,487 (8.7)	4,355 (25.5)	1,898 (11.1)	2,323 (13.6)	6,520 (38.2)	17,079 (100)

参考文献：林春男，阪神・淡路大震災からの生活復興 2001－パネル調査結果報告書―，京都大学防災研究所，2001

・問 21、22、23 に共通する因子（表６－２）

問 21、22、23 に対する回答のうち、分析可能な回答 9,171 について因子分析を行ったところ、表６－２のとおり、各設問に共通する４つの因子（①～④）が抽出され、これらの因子と関係性の強いグループ（A～D）の特徴から、４つの因子は、①現在の生活への満足の度合いを表す「生活満足度」、②身体的なストレスの度合いを表す「からだのストレス」、③精神的なストレスの度合いを表す「こころのストレス」、④震災前と比べて現在の生活が向上していると感じる度合い

を表す「生活再適応感」に分類でき、これらを回答者の生活復興感を表す生活復興感指標とした。

この「生活満足度」「からだのストレス」「こころのストレス」「生活再適応感」の４つの生活復興感指標を用い、回答者の相対的な状態を定量的に把握することで以後の分析を行った。

表６－２　因子分析の結果(N=9,171)

	第１因子	第２因子	第３因子	第４因子
問21　あなたは現在の生活を震災前の生活と比べてどのように感じておられますか。				
①自分のしていることに生きがいを感じることは	0.204	-0.125	-0.132	0.863
②日常生活を楽しく送ることは	0.276	-0.131	-0.182	D 0.842
③自分の将来は明るいと感じることは	0.332	-0.083	-0.199	0.737
問22　あなたは最近１ヶ月の間につぎにあげた「こころやからだの状態」を、どのくらい体験されましたか。				
①気持ちが落ち着かない	-0.227	0.264	0.844	-0.171
②気分が沈む	-0.260	0.275	C 0.836	-0.201
③集中できない	-0.224	0.295	0.817	-0.192
④息切れがする	-0.123	0.829	0.254	-0.125
⑤胸がしめつけられるような痛みがする	-0.122	B 0.850	0.216	-0.105
⑥めまいがする	-0.133	0.802	0.218	-0.062
問23　あなたは現在つぎにあげたことがらについて、どの程度満足されていますか。				
①毎日のくらしに	0.759	-0.110	-0.193	0.281
②ご自分の健康に	0.527	-0.439	-0.095	0.200
③今の人間関係に	A 0.605	-0.202	-0.130	0.240
④今の家計の状態に	0.780	-0.035	-0.161	0.085
⑤今の家庭生活に	0.754	-0.127	-0.170	0.208
⑥ご自分の仕事に	0.702	-0.073	-0.145	0.166

15の質問項目 →　　４つに集約

新しい意味づけ →

①生活満足度	②からだのストレス	③こころのストレス	④生活再適応感

⑵ コミュニティに関する諸要因と生活復興感の関係

４つの生活復興感指標を用いて、コミュニティに関する諸要因と生活復興感の関係を分析したところ、次のことが明らかとなった。

ア　団地環境などコミュニティの外部要因と生活復興感との関係

①団地環境

団地の立地条件や規模と、個々人の生活復興感はほとんど関係しない

団地や居住棟の規模（第２章１(1)参照)、最寄り鉄道駅までの距離や半径 1ｋm以内の店舗数（第２章２(1)参照）など、団地の立地条件や規模によって、居住者の生活復興感に違いがあるかどうかを分析したところ、統計的に有意な差は見られず、個々人の生活復興感にはほとんど影響を与えていないという結果が示された。

②住宅満足度

現在の住宅に満足している人の方が、生活復興感が高い

住宅に対する評価についての設問（問15）の回答結果（N=8,503）を因子分析することで得られた住宅満足度を表す指標を用いて、図６－４のように、回答者を、現在の住居や住環境に対して満足感や前向きの意識を持っている「現住宅満足」タイプ（25.8%）と、現在の住宅に満足できず過去の住居や住環境を回帰したり、他の住宅への指向を持っている「現住宅不満」

タイプ（23.9%）に分類できた。

表６－３　問 15 の回答結果

問 15 あなたは今の住宅についてどのように思いますか	そう思う	どちらでもない	そう思わない	無回答	計 (%)
①他の住宅よりこの団地がいちばんいい	4,800 (28.1)	5,179 (30.3)	2,640 (15.5)	4,460 (26.1)	17,079 (100)
②この住宅は住みごこちがよい	5,829 (34.1)	4,987 (29.2)	2,130 (12.5)	4,133 (24.2)	17,079 (100)
③今、住んでいる環境を大切にしたい	8,635 (50.6)	3,383 (19.8)	1,079 (6.3)	3,982 (23.3)	17,079 (100)
④地震の時に住んでいたところのほうがよかった	5,844 (34.2)	3,069 (18.0)	3,718 (21.8)	4,448 (26.0)	17,079 (100)
⑤この住宅に不満はない	4,501 (26.4)	4,995 (29.2)	3,163 (18.5)	4,420 (25.9)	17,079 (100)
⑥この住宅にずっと住み続けるつもりだ	9,034 (52.9)	3,001 (17.6)	1,764 (10.3)	3,280 (19.2)	17,079 (100)
⑦公営住宅ではない住宅に住みたかった	2,306 (13.5)	3,627 (21.2)	5,529 (32.4)	5,617 (32.9)	17,079 (100)
⑧仮設住宅に住んでいたときのほうがよかった	1,911 (11.2)	1,844 (10.8)	6,415 (37.6)	6,909 (40.4)	17,079 (100)
⑨今の住宅で安心して暮らしている	7,996 (46.8)	4,014 (23.5)	1,982 (11.6)	3,087 (18.1)	17,079 (100)

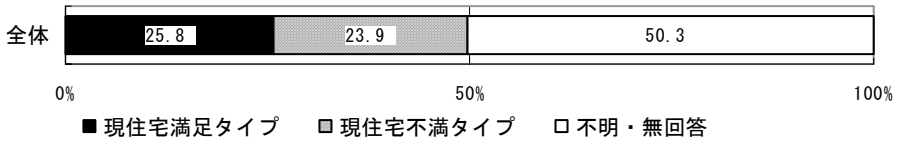


図６－４　現住宅意識状況（Ｎ＝17,079：因子分析）

この住宅満足度タイプと生活復興感との関係について箱ひげ図(注)で見ると、「現住宅満足」タイプの方が生活満足度、生活再適応感のいずれの指標も高い。この結果から、住宅に対する意識が現在の生活復興感にも強く影響を及ぼしていることが認められる（図６－５）。

注）データの分布の様相を視覚的に捉えやすく表すために工夫された図。分布の箱と上下のヒゲとで表されている。箱の中の横線がその分布の中央値、箱の上下の辺がそれぞれ上位 75%、下位 75%の値を示し、上下に出たヒゲの端は最大値、最小値を表す。図６－５を見ると、生活満足度、生活再適応感いずれにおいても、「現住宅満足」タイプの箱のほうが、「現住宅不満」タイプの箱よりも高い位置にあることがわかる。

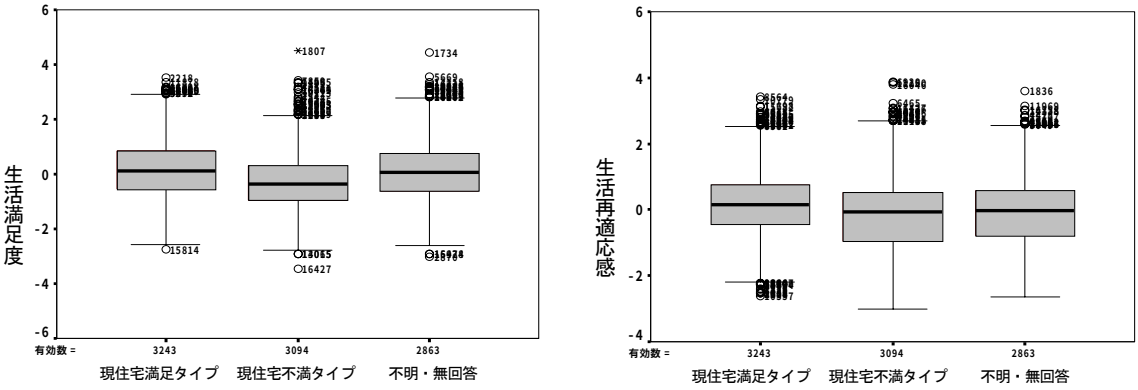


図６－５　「住宅満足度」と生活復興感

③移動距離・入居申込回数

被災時の居住地と現在の居住地の移動距離の大小は、居住者の生活復興感にはほとんど影響を与えていない

調査対象者のうち、住居の移動が発生した世帯全体（N=12,017）の移動距離の平均値は5.76km であり、中央値は 2.65km であった（第６章第４節１参照）。

移動のあった回答者のうち、移動距離の中央値 2.65km より小さい移動であったグループを「近距離移動」、大きい移動があったグループを「遠距離移動」と分類し、生活復興感との関係を分析したところ、統計的に有意な差が認められなかった。これは、入居初期の頃には新たなコミュニティ形成や震災前の居住地環境との違いが懸念されたものの、時間が経過した現在では、生活の定着化が進み、移動距離の大小は、居住者の生活復興感にはほとんど影響していないことをうかがわせる。

入居申込回数の少ない居住者は生活再適応感が高く、回数の多い者はからだのストレスが高い

災害復興公営住宅への入居申込回数と生活復興感との関係を分析したところ、からだのストレスと生活再適応感で統計的に有意な差が認められた（図６－６）。

すなわち、１、２回目の申込で入居した居住者の生活再適応感は高いが、申込回数が３回目以上になると低くなる。また、からだのストレスは回数を増すごとに高くなっている。これは、申込回数が少ない居住者ほど早期に災害復興公営住宅へ入居しており、たとえ移動距離が大きくても、時間の経過とともにその住宅に適応してきているためであると考えられる。

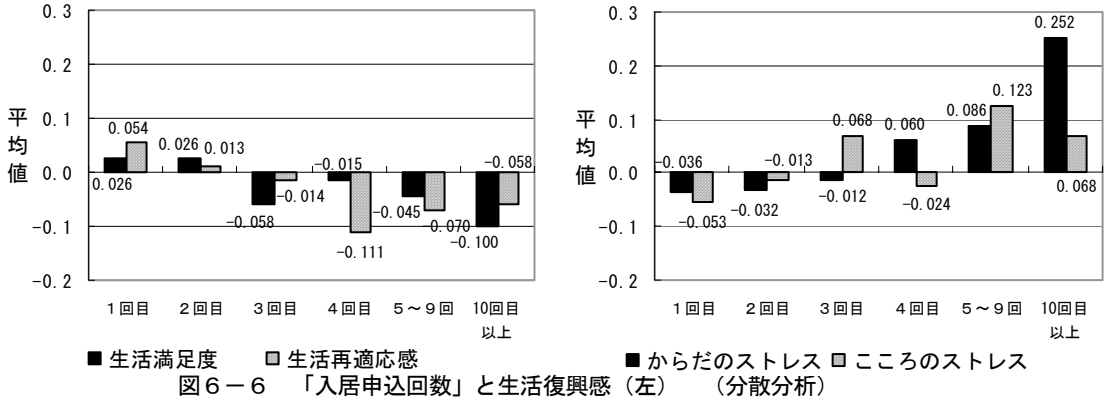


図６－６　「入居申込回数」と生活復興感（左）　（分散分析）
「入居申込回数」とからだ・こころのストレス（右）　（分散分析）

イ　公的支援者や自治会等の活動と生活復興感との関係

①公的支援者

公的支援者の活動は、ストレスを持ち支援が必要とされる居住者に対して行われており、活動とニーズがマッチングしている

公的支援者のコミュニティ支援活動の自己評価（第５章１(2)③ア参照）と、その団地に住んでいる居住者の生活復興感に、どのような関係があるのかを見るため、公的支援者の自己評価の回答について、表６－４に示す 14 の活動を「活動を行っている（あてはまる・どちらかというとあてはまる）」と「あまり活動を行ってない（あてはまらない・どちらかというとあてはまらない）」の２グループに集約し、居住者の生活復興感の違いを分析した。

その結果、統計的に有意な差のある組み合わせが９つ見つかった。

表６－４に①で示した組み合わせは、図６－７のとおり公的支援者が活動を行っている団地の居住者の方が、ややストレスが高いという結果となった（①）。これは公的支援者が、ストレスを持ち支援を必要としている居住者がいる団地において、コミュニティと関係を持つ活動（5、7、9）や見守りに関する活動（12、13、14）を行っていることを表しており、活動とニーズがマッチングしていることを示している。

表６－４に②で示した組み合わせは、図６－８のとおり公的支援者が活動を行っている団地の居住者の方が生活再適応感が高いという結果となっている（②）。これは公的支援者が、入居者にコミュニティへの参加を促すための一歩踏み込んだ活動（3）を行うことで、その団地の居住者全体に一定の効果を及ぼしていることを示している。

表６－４　支援者のコミュニティ支援活動と団地居住者の生活復興感の平均値との関係（N=175）
（ノンパラメトリック検定・カイ２乗検定）

コミュニティ支援活動の自己評価		生活満足度	生活再適応感	からだのストレス	こころのストレス
1	入居者と気軽に話し合えるようにしている				
2	入居者同士が日ごろからあいさつできるよう気配り				
3	入居者に話し合いの働きかけ		②		
4	入居者が親しくなる場を作るように努める				
5	自治会との良好な関係をとるよう努める				①
6	自治会への情報支援など行うようにしている				
7	集会室など自治会活動への支援を行うようにしている				①
8	地域資源の把握・紹介をしている				
9	コミュニティづくりの情報など積極的提供をしている			①	
10	コミュニティ現状の把握及び適切な助言をするよう心がける				
11	トラブルに巻き込まれないよう気をつけている				
12	外泊・長期不在時に声かけるようにしてもらっている			①	①
13	緊急連絡先を設け、そこに鍵を預けるように提案している			①	①
14	不安情報が入ったときには訪問して様子見るようにしている			①	

＜上記表の説明＞
① 支援者が活動を行っている団地の居住者グループのストレスが、支援者が活動を行っていない団地の居住者グループよりも高い。
② 支援者が活動を行っている団地の居住者グループの生活再適応感が、支援者が活動を行っていない団地の居住者グループよりも高い。
※ １団地に複数職種の支援者が配置されている団地については、常駐が中心のＬＳＡ＞コミュニティ支援も行っているいきいき県住推進員＞巡回で見守り活動が中心のＳＣＳの順番で回答を優先して集計した。

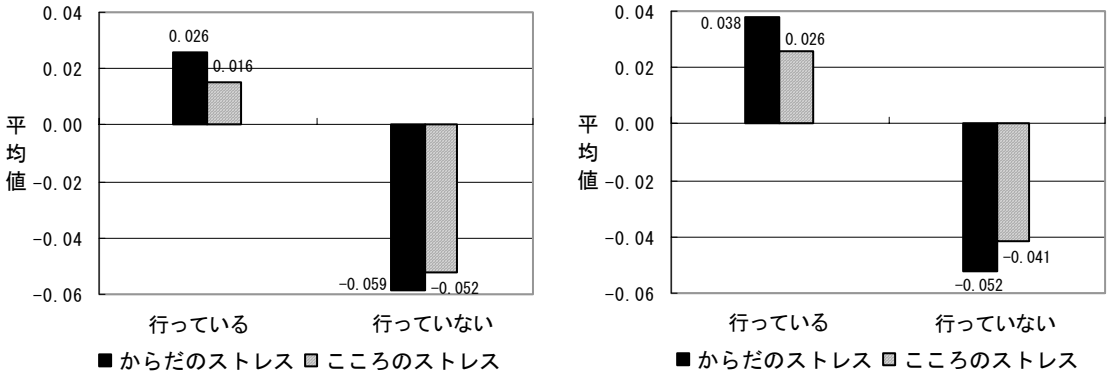


図６－７「外泊・長期不在時に声をかけてもらうようにしている」とからだ・こころのストレス（左）（分散分析）
「緊急連絡先を指定し、そこに鍵を預けるよう提案」とからだ・こころのストレス　（右）（分散分析）

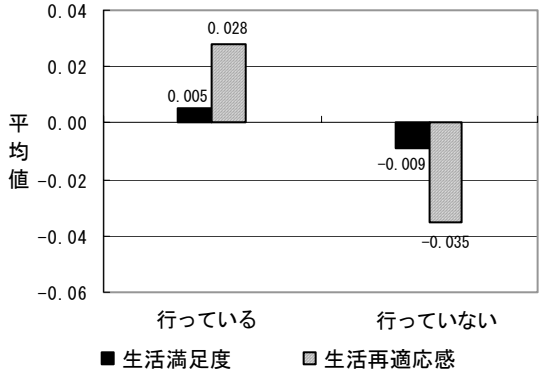


図６－８「入居者に話し合いの働きかけをしている」と生活復興感（分散分析）

コミュニティ活動のキーパーソンとなる人物などは、生活復興感を高めている

公的支援者から見て「コミュニティ活動を高めていく上で重要な人物」や「自らコミュニティ活動を行っている人」の行動について、表６－５に示す 18 の設問の回答結果（第５章１(2)③カ参照）と生活復興感との関係を分析した。

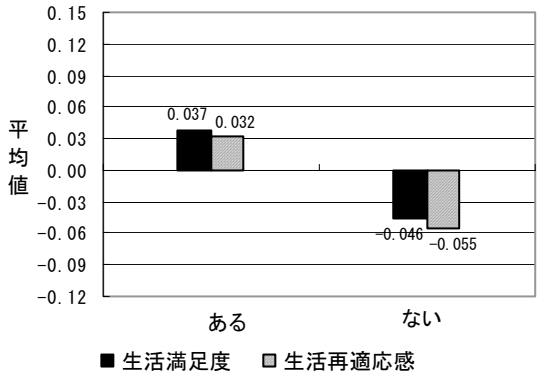
その結果、重要な人物またはコミュニティ活動を行っている人たちが“いる”と“いない”で統計的に有意な差が認められた組み合わせが表６－５である。ここで示された組み合わせはいずれも“いる”グループが“いない”グループより生活復興感が高いという結果を示しており、「コミュニティ活動を高めていく上で重要な人物」の存在や「近隣のコミュニティ活動を行っている人」がいる団地では、居住者全体の生活復興感を高める結果となっていることがわかる。

親しい近所付き合いを示す行動として、「持ち回りでお茶会などを行っている」とする団地の居住者は、図６－９のとおり生活満足度や生活再適応感が高く、からだのストレスが低い。この活動については、震災後から外部支援者が積極的に行っている行事や講座のような先進的な活動が着実に根づき、効果を上げている結果と捉えることができる。また、「世話焼きが活動している」「助け合いの中心人物がいる」「コーディネーターが存在する」といった団地内のコミュニティの中で、人間関係に一歩深く踏み込んだ活動が外部支援者の目にも見えるような団地は、個々人の生活復興感によい影響を及ぼしていると見ることができる。

表６－５　公的支援者から見た入居者の状況と生活復興感（分散分析）(N=175)

人の存在			生活満足度	生活再適応感	からだのストレス	こころのストレス
親しいつきあい	①	家族ぐるみの交流			◎	
	②	グループ仲間の交流			◎	
	③	井戸端会議				
	④	持ち回りでお茶会	◎	◎	◎	
	⑤	住民が出入りしている家				
	⑥	一緒に旅行		○		
助け合いきっかけ	①	おすそわけ				○
	②	友愛訪問や助け合い				
	③	世話焼きが活動	◎		◎	○
	④	葬式時助け合う習慣			◎	
ふれあう場所	①	普段玄関開けっ放し				
	②	いつも立ち話できる場所				
助け合い仕掛け人	①	助け合いの中心人物	○			◎
	②	コーディネーター	◎			
	③	口利きの人				○
	④	こじ開ける人				
	⑤	悩みを打ち明けやすい人				
	⑥	助けられ上手な人				

＜上記表の説明＞　印のある関係が統計的に有意。◎は有意確率 0.01 未満で強い関係を示す。○は有意確率 0.05 未満で関係のあることを示す。
※　１団地に複数職種の支援者が配置されている団地については、常駐が中心のＬＳＡ＞コミュニティ支援も行っているいきいき県住推進員＞巡回で見守り活動が中心のＳＣＳの順番で回答を優先して集計した。



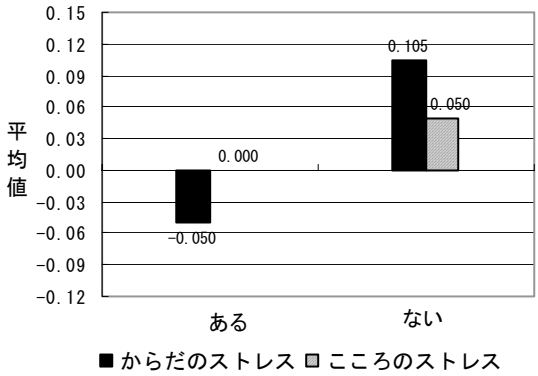


図６－９「持ち回りでお茶会」と生活復興感（左）（分散分析）
「持ち回りでお茶会」とからだ・こころのストレス（右）（分散分析）

②自治会

居住者名簿を作成したり、総会を開催している自治会に属している居住者は、生活復興感が高い

自治会の運営状況に関する「総会を開催」「役員会を開催」「居住者名簿を作成」についての設問の回答結果（第４章３(1)③④参照）から、それぞれで「ある」と回答した自治会に属する居住者と、「ない」と回答した自治会に属する居住者の２グループに分け、両グループ間で生活復興感に違いがあるのかを分析した。

その結果「居住者名簿の作成の有無」に関して統計的に有意な差が認められ、居住者名簿を作成している自治会に属する居住者のグループは、作成していないグループより生活満足度が高いことがわかった（図６－10）。

同様に生活復興感指標と「総会を開催」について分析したところ、統計的に有意な差が認められ、総会を開催している自治会の居住者グループの方が、そうでないグループより生活再適応感が高いことが示された（図６－10）。

居住者を把握しておくことは自治会活動の基本であるが、とくに災害復興公営住宅においては、共益費の徴収・管理が居住者自身（自治会等）に求められており、また高齢化率が高い団地が多く、安否確認を行うためにも居住者を把握しておくことが必要になる。そのため、居住者名簿を作成している自治会では、個々の居住者とコミュニケーションを図り、団地内の状況把握に努めており、他方、居住者の方でも自治会の存在を認知し、肯定的に捉えている（名簿に名前を載せている）といえる。

また、総会を開催することにより、自治会の運営状況は全加入者に公開され、また、重要な案件については総会に出席することで、議論や決定に参加できる。このようにコミュニティの運営に全居住者が参加できるような開かれた運営をしている自治会においては、居住者のコミュニティへの帰属意識を高め、生活再適応感を高める結果となっていることが考えられる。

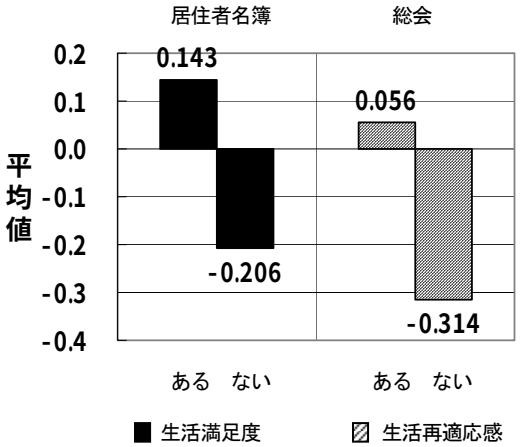


図６－10　「居住者名簿の有無」（左）「総会の有無」（右）と生活復興感　（分散分析）

③自治会の存在や地域活動への参加

自治会の存在やまちの活動・イベントへの参加は、個々人の生活復興感を高める

「自治会の有無」及び「まちの活動やイベントへの参加」についての設問（問26、27）の回答結果（N＝8,006）（第３章６(2)①②参照）と生活復興感との関係について分析したところ、生活満足度、こころのストレス、生活再適応感について統計的に有意な差が認められ、とくに生活再適応感において関係性が強いことがわかった（図６－11）。

地域活動への参加は、個々人の生活復興感を高めるとともに、コミュニティ全体に与える影響も大きいことから、今後もこれらの活動に積極的に参加するしくみづくりが求められるといえる。

表６－６　問 26、27 の回答結果

問 26　現在住んでいるところに自治会はありますか。	ある	ない	組織はあるが活動がない	知らない・興味がない	無回答	計(%)
	13,750 (80.5)	1,118 (6.5)	300 (1.8)	481 (2.8)	1,430 (8.4)	17,079 (100)

問 27　あなたの住んでいるまちには、いろいろな活動やイベント、また、近所づきあいがあると思いますか。	たびたび参加	ときどき参加	ほとんど参加しない	無回答	計(%)
①まちのお祭りや運動会、盆踊りなどのイベントに参加したことはありますか	2,055 (12.0)	4,597 (26.9)	8,803 (51.6)	1,624 (9.5)	17,079 (100)
②まちのそのようなイベントに、お世話をする立場で参加したことはありますか	1,041 (6.1)	2,435 (14.3)	11,364 (66.5)	2,239 (13.1)	17,079 (100)
③まちの日頃の活動（高齢者のお世話、青少年育成、防犯防火活動など）に参加したことはありますか。	1,022 (6.0)	2,262 (13.2)	11,475 (67.2)	2,320 (13.6)	17,079 (100)

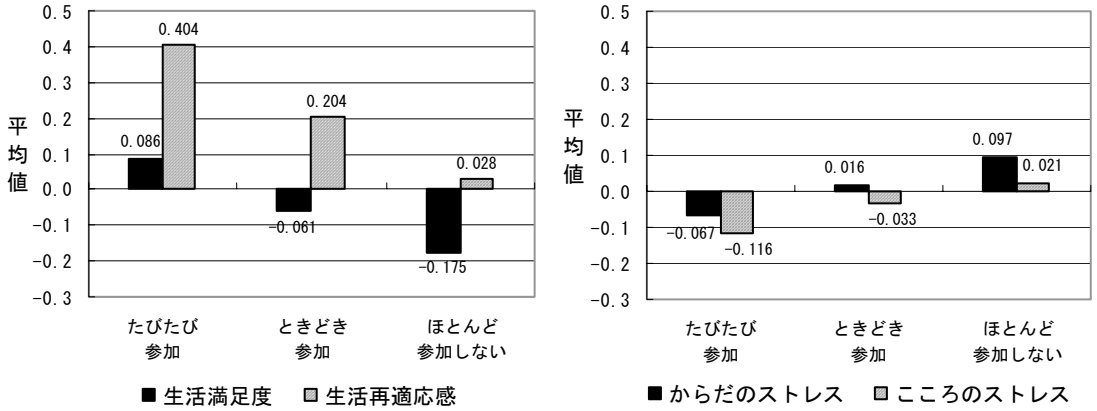


図６－11　「まちの活動やイベントへの参加」と生活復興感（左）（分散分析）
「まちの活動やイベントへの参加」とからだ・こころのストレス（右）（分散分析）

ウ　近隣等の人間関係と生活復興感との関係

①人との出会い

被災後に重要他者と出会った人ほど、生活復興感が高い

その人のおかげで被災後の生活設計が定まったと感じるような「誰か」（重要他者）と出会ったかどうかの設問（問 20）の回答結果（N＝8,190）（第３章４(2)③参照）と、生活復興感との関係について分析したところ、生活満足度、生活再適応感について統計的に有意な差が認められた。図６－12 に示すとおり、重要他者と出会ったと回答した居住者の方が、いずれの指標もその値が高く、「人との出会い」が個々人の生活復興感に及ぼす影響が大きいことがわかった。

表６－７　問 20 の回答結果

問 20　人は人生で自分以外の様々な人々とのかかわりを通じて自分の人生をつくっていくものだと言われます。あなたは、その人のおかげで被災後の生活設計が定まったと感じられるような『だれか』にめぐりあわれましたか？	めぐりあった	めぐりあわなかった	無回答	計(%)
	6,095 (35.7)	8,629 (50.5)	2,355 (13.8)	17,079 (100)

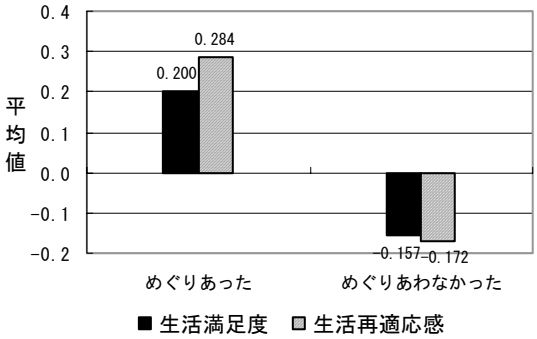


図６－12　重要人物との出会いと生活復興感（分散分析）

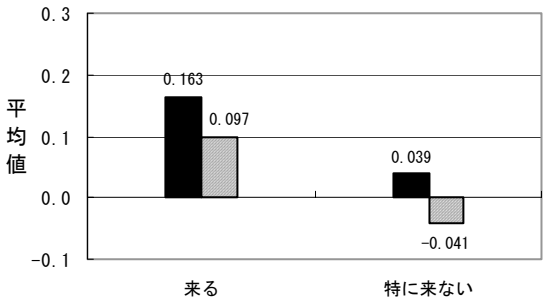
②個々人に対する見守り

自宅への訪問者の存在は、個々人の生活復興感を高める

「団地内の役員」「団地外の支援者」の訪問の有無・頻度についての設問（問 31）の回答結果（N＝6,964）（第３章６(4)①②参照）と生活復興感との関係について分析したところ、「団地内の役員」の訪問は生活満足度と生活再適応感について、「団地外からの支援者」の訪問は、生活満足度について、それぞれ統計的に有意な差が認められた。図６－13 に示すとおり、「来る」と回答した居住者の方が、いずれの指標もその値が高く、自宅への訪問者の存在は、個々人の生活復興感を高める効果を持っていることが示された。

表６－８　問 31 の回答結果

問 31　あなたの世帯に訪問してこられる人について、あてはまる回数をお答え下さい。	週４回以上	週２・３回	週１回	月２・３回	月１回	回数不明	特に来ない	無回答	計 (%)
①役所関係の人（警察、保健所の人含む）	79 (0.5)	150 (0.9)	408 (2.4)	538 (3.2)	2,395 (14.0)	339 (2.0)	9,291 (54.3)	3,879 (22.7)	17,079 (100)
②団地内で係をしている人（自治会の役員や民生委員など）	147 (0.9)	258 (1.5)	723 (4.3)	888 (5.2)	2,923 (17.1)	126 (0.7)	8,196 (47.9)	3,818 (22.4)	17,079 (100)
③団地の外から支援に来てくれる人（友愛訪問やボランティアの人など）	149 (0.9)	281 (1.6)	562 (3.3)	401 (2.3)	1,000 (5.9)	15 (0.1)	10,398 (60.9)	4,273 (25.0)	17,079 (100)



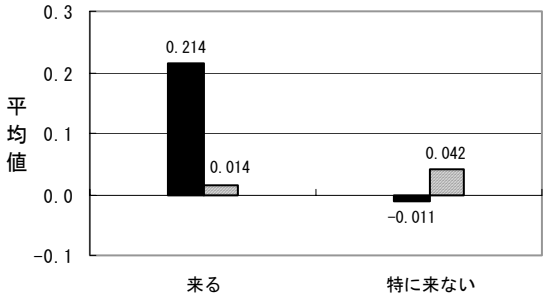


図６－13　「団地内の役員をしている人の訪問」と生活復興感（左）（分散分析）
「団地外からの支援者の訪問」と生活復興感（右）（分散分析）

③近所づきあい

近所づきあいの人数が多いほど、生活復興感が高い

近所づきあいの有無や人数についての設問（問 24）の回答結果（N＝8,326）（第３章６(1)①参照）と生活復興感との関係について分析したところ、生活満足度、生活再適応感ともに統計的に有意な差が認められた。

図６－14 に示すとおり、日常生活での近所づきあいの人数が多いほど、生活満足度や生活再適応感が向上するということがわかる。前述した「重要他者」は、日常の人間関係の中に存在している可能性が高い。すなわち、人間関係が豊かな人ほど、重要他者と出会う可能性も高く、結果として生活満足度や再適応感を高めることにつながっていると理解できる結果であった。

表６－９　問 24 の回答結果

問 24　近所づきあいの有無	０人	１～４人	５～９人	10 人以上	人数不明	無回答	計(%)
①いつもあいさつをする近所の人は	3,124 (18.3)	3,794 (22.2)	3,271 (19.2)	4,205 (24.6)	764 (4.5)	1,921 (11.2)	17,079 (100)
②同じ趣味やスポーツをいっしょにする人は	10,911 (63.9)	1,953 (11.4)	762 (4.5)	965 (5.7)	91 (0.5)	2,397 (14.0)	17,079 (100)
③その人の家に遊びに行ったりしたことがある近所の人は	8,808 (51.6)	4,851 (28.4)	996 (5.8)	314 (1.8)	96 (0.6)	2,014 (11.8)	17,079 (100)
④おすそわけをしたり、おみやげをあげたりもらったりする近所の人は	5,599 (32.8)	7,116 (41.7)	1,921 (11.2)	556 (3.3)	161 (0.91)	1,726 (10.1)	17,079 (100)

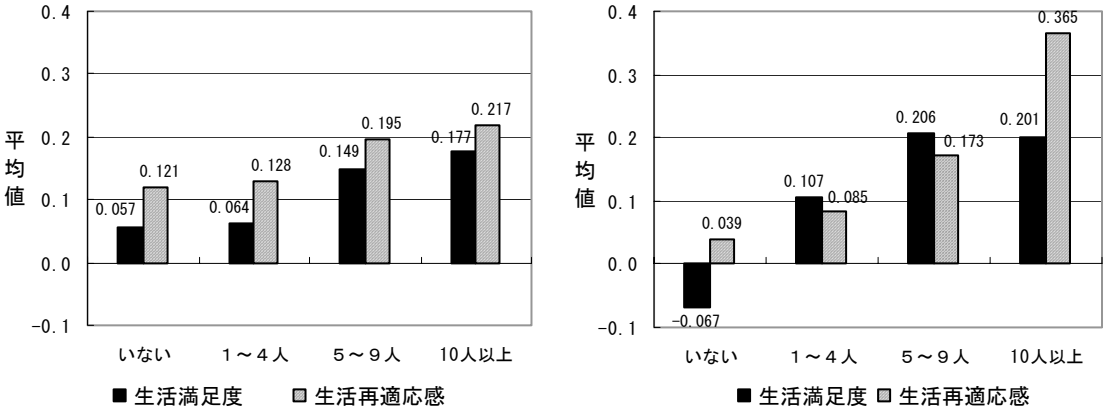


図６－14　「あいさつする人数」と生活復興感（左）（分散分析）
「おすそわけなどをする人数」と生活復興感（右）（分散分析）

④同居家族人数

家族人数が多いほど、生活再適応感は高くなる

同居している家族人数についての設問（問 33）の回答結果（N＝7,291）（第３章１(1)②参照）と生活復興感との関係について分析したところ、生活満足度、生活再適応感ともに統計的に有意な差が認められた。図６－15 に示すとおり、同居家族の人数が増えるほど、生活満足度は低くなるが、生活再適応感は大きく向上するという結果が見られた。

表６－10　問 33 の回答結果

問 33　現在（ご自分をふくめて）同居しているご家族は何人ですか	１人	２人	３人	４人	５人	６人	７人以上	無回答	計(%)
	6,388 (37.5)	5,466 (32.0)	1,911 (11.2)	1,027 (6.0)	383 (2.2)	102 (0.6)	38 (0.2)	1,764 (10.3)	17,079 (100)

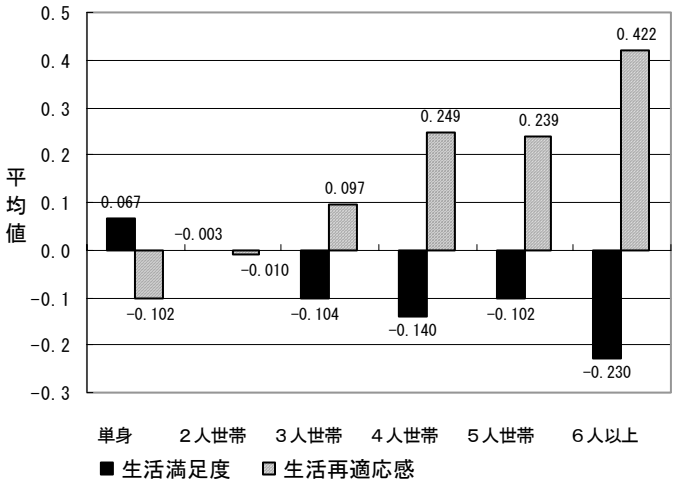


図６－15　「家族人数」と生活復興感　（分散分析）

エ　個々人の状況と生活復興感との関係

①回答者年齢

高年齢であるほど生活再適応感は低くなるが、生活満足度は高くなる

回答者の年齢についての設問（問 32）の回答結果（N＝8,242）（第３章１(1)①参照）と生活復興感との関係について分析したところ、統計的に有意な差が認められた。図６－16 に示すとおり、高齢者ほど生活満足度が高くなるが、生活再適応感は低くなっている。

また、20 代・30 代の生活再適応感が最も高く、生活満足度は 75 歳以上が高く、40 代・50 代が低い。

表６－11　問 32 の回答結果

問 32　あなたの年齢と性別を教えて下さい	20 歳代	30 歳代	40 歳代	50 歳代	60 歳代	70 歳代	80 歳代	無回答	計(%)
	479 (2.8)	1,118 (6.5)	1,019 (6.0)	2,549 (14.9)	4,845 (28.4)	4,878 (28.6)	1,678 (9.8)	513 (3.0)	17,079 (100)

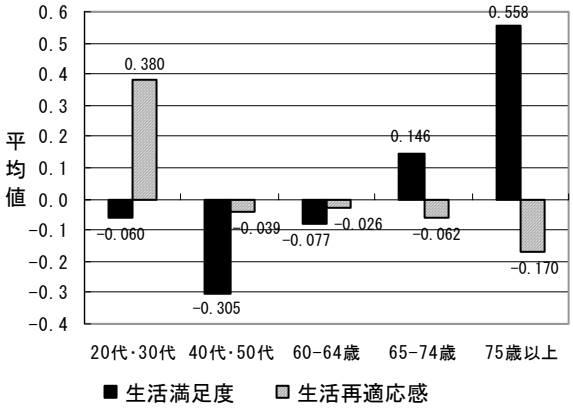


図６－16「回答者年齢」と生活復興感　（分散分析）

②住宅被害

住宅被害が小さかった人ほど、生活復興感は高い

被災時に住んでいた住宅の被害についての設問（問 4）の回答結果（N＝8,268）（第３章１(3)①参照）と生活復興感との関係について分析したところ、図６－17 に示すとおり、住宅被害が小さかった人ほど、生活満足度、生活再適応感がともに高いことがわかる。また、被害の大きかった人は、からだやこころにストレスが高かった。

表６－12　問４の回答結果

問４　震災時、お住まいになっていた住宅はどのような被害を受けましたか。	全壊	半壊	一部損壊	全焼	半焼	被害軽微	被害無し	無回答	計(%)
	11,574 (67.8)	2,533 (14.8)	677 (4.0)	1,148 (6.7)	111 (0.6)	360 (2.1)	387 (2.3)	289 (1.7)	17,079 (100)

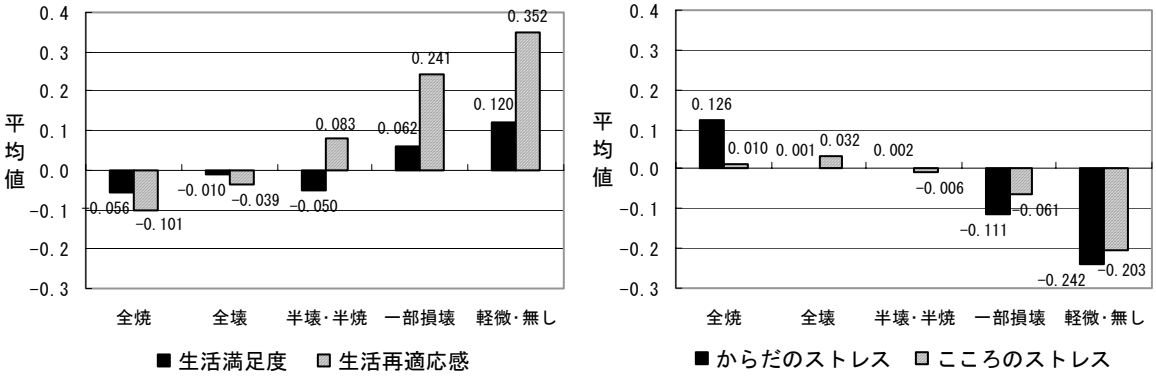


図６－17　「住宅被害」と生活復興感（左）（分散分析）
「住宅被害」とからだ・こころのストレス（右）（分散分析）

③家計状況

家計の収支が「黒字」「均衡」の人は、「赤字」の人に比べて生活満足度、生活再適応感が高く、からだとこころのストレスが低い

家計の収支が生活復興感に与える影響を調べるために、家計に関する設問の回答（第３章４(1)参照）から、収入・預貯金については「増えた」：＋1 点、「変わらない」：0 点、「減った」：－1 点とし、一方、支出については「増えた」：－1 点、「変わらない」：0 点、「減った」：＋1 点として集計した。これにより、＋（正値）となったものを「黒字」、0 になったものを「均衡」、－（負値）になったものを「赤字」と定義した。

その結果と生活復興感指標の関連を見るために、箱ひげ図を用いてグラフ化したものが図６―18 である。これらによれば、家計の収支が「黒字」、「均衡」にグループ分けされている人々は、生活満足度、生活再適応感がともに高く、からだとこころのストレスがともに低い状態にあり、一方、「赤字」にグループ分けされている人々は、生活満足度、生活再適応感が低く、からだとこころのストレスが高い状態にあることがわかる。

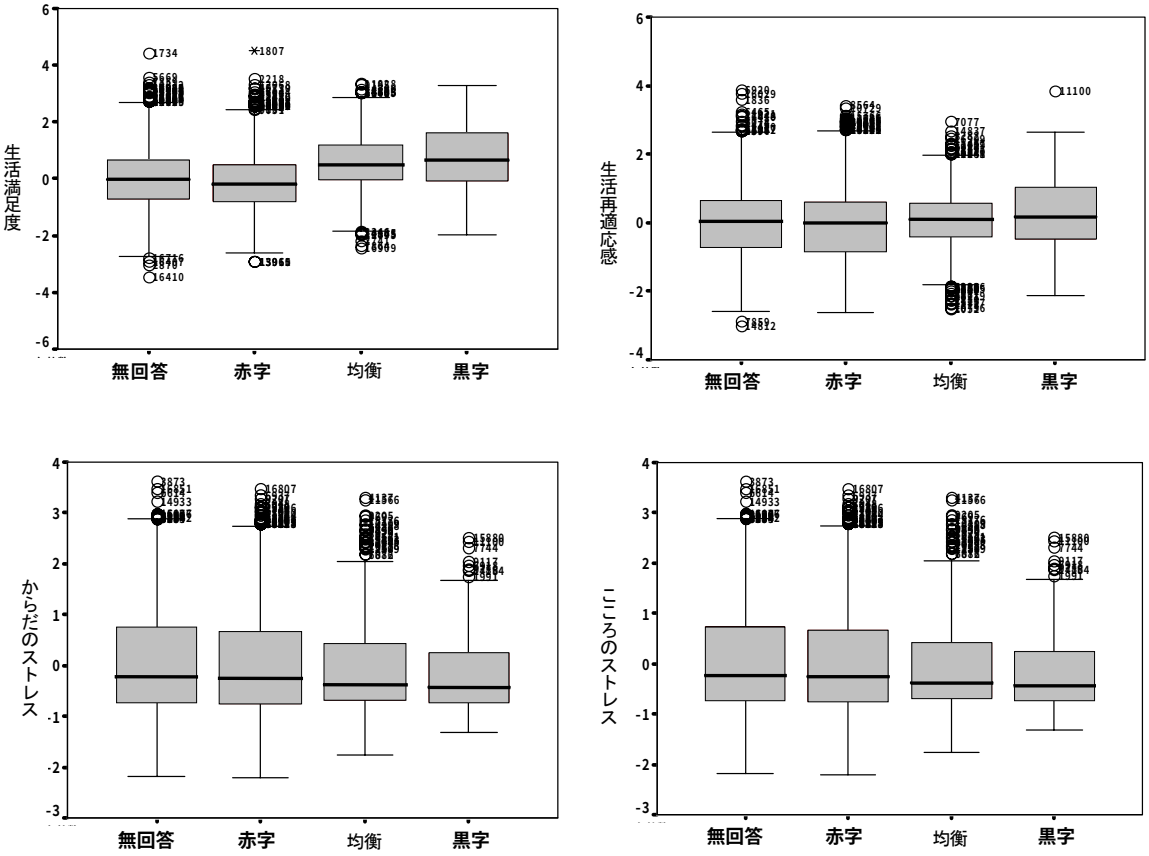


図６－18　「家計のやりくり感」と生活復興感、からだ・こころのストレス

2　居住者の生活復興感（生活満足度・生活再適応感）の総合的分析

(1) 被災後の「くらしに対する姿勢」の指標

個々人が災害などの被害から回復していく過程は、「現在のくらしが『日常』であると感じる意識」や「震災被害を自分にとって意味ある経験として認識しようとする意識」によって左右されることが、先行調査研究で示されている。つまり、居住者が被災後の現在の暮らしにどのような意識を持っているかが、個々人の生活復興感に大きな影響力を持っているのである。

ここでは先行調査研究を参考に、居住者調査の「現時点で震災によって受けた被害をどのように受け止めているか（問 18）」「現在の暮らしを震災前のくらしと比べてどのように位置づけているか（問 19）」という設問の回答結果を分析することにより、居住者が被災後の現在のくらしにどのような姿勢を持っているのかを表す「くらしに対する姿勢」指標を作成した。

表６－13　問 18、19 の回答結果

問 18＜現在の暮らしに対する評価＞「現時点で震災によって受けた被害をどのように受け止めているか」	まったくそう思う	どちらかといえばそう思う	どちらとも言えない	どちらかといえば思わない	まったく思わない	無回答	計 (%)
①ここの団地で、どのように暮らしていけば良いのか、そのめどは立った	1,060 (6.2)	3,815 (22.3)	6,250 (36.6)	1,195 (7.0)	1,431 (8.4)	3,328 (19.5)	17,079 (100)
②毎日の生活は、震災前と同じように、決まったことのくり返しに感じられるようになった	1,514 (8.9)	4,400 (25.8)	4,324 (25.3)	1,984 (11.6)	1,764 (10.3)	3,093 (18.1)	17,079 (100)
③震災直後は物欲が減ったという人が多かったが、今はもう震災前と変わらない	1,901 (11.1)	3,609 (21.1)	4,914 (28.8)	1,764 (10.3)	1,447 (8.5)	3,444 (20.2)	17,079 (100)
④現在が、「ふつう」のくらしに感じられる	1,932 (11.3)	4,673 (27.5)	4,015 (23.5)	1,903 (11.1)	1,851 (10.8)	2,705 (15.8)	17,079 (100)

参考文献：Berger, P.L., & Luckman, T. Social construction of reality: A treatise in the sociology of knowledge.NY Anchorbooks, 1966.

問 19＜震災の体験に対する評価＞「現在の暮らしと震災前の暮らしをどのように位置づけているか」	まったくそう思う	どちらかといえばそう思う	どちらとも言えない	どちらかといえば思わない	まったく思わない	無回答	計 (%)
①震災での体験は、日常生活では得られない得がたい経験だった	6,582 (38.6)	3,491 (20.4)	2,009 (11.8)	722 (4.2)	1,407 (8.2)	2,868 (16.8)	17,079 (100)
②震災での体験は、私の過去から消し去ってしまいたい経験だった	4,280 (25.0)	2,526 (14.8)	3,015 (17.7)	1,724 (10.1)	2,362 (13.8)	3,172 (18.6)	17,079 (100)
③「自分に与えられた人生の使命とは何か」を考えるようになった	2,633 (15.4)	3,425 (20.1)	4,967 (29.1)	1,095 (6.4)	1,215 (7.1)	3,744 (21.9)	17,079 (100)
④今ではもう震災を話題にすることもなくなった	1,852 (10.8)	3,572 (20.9)	3,494 (20.5)	2,390 (14.0)	2,714 (15.9)	3,057 (17.9)	17,079 (100)

参考文献：Frankl, V. E. Man's search for meaning. NY: Pocket Books, 1959.
Lifton, R.J. Death in Life: The Survivors of Hiroshima. London: Weidenfeld and Nicolson, 1968.
Kubler-Ross, E. On Death and Dying. NY:Simon & Schuster/Touchstone,1969

・問 18、19 に共通する因子

問 18､19 に対する回答のうち､分析可能な 11,638 サンプルについて因子分析を行ったところ、表６－14 のとおり、各設問に共通する３つの因子（①～③）が抽出され、これらの因子と関係性の強い設問のグループ（A～C）の特徴から、３つの因子は、①現在の生活をすでに日常的なものと捉えて活動している「自立（回復)」、②震災体験を重要なものと感じ、使命感を持って前向きに活動している「自立（奮闘中)」、③震災経験を忘れたい過去と感じ、自己のあり方を決めかね、十分な活動ができていない「再興途上」に分類でき、これらを回答者が被災後の現在のくらしにどのような姿勢を持っているのかを表す「くらしに対する姿勢」の指標とした。

表６－14　因子分析の結果(N=11, 638)

		第１因子		第２因子		第３因子
問 18　震災から約８年がたちますが、現在の毎日のくらしについておたずねします。						
①どのように暮らしていけばいいかめどが立った		0.709		0.128		-0.108
②震災前と同じ決まったことの繰り返しに感じる	A	0.736		0.012		0.086
③直後は物欲減だがいまは前と変わらない		0.689		0.039		0.083
④ふつうのくらしに感じる		0.802		0.062		-0.007
問 19　震災の体験についてお聞きします。						
①日常では得られない得がたい経験だった		0.174		0.751		-0.093
②私の過去から消し去ってしまいたい経験だった		-0.140	B	0.209		0.749
③自分に与えられた人生の使命とは何かを考えるようになった		0.003		0.807	C	0.125
④もう震災を話題にすることもなくなった		0.196		-0.169		0.743

８つの質問項目 →　　３つに集約

新しい意味づけ →

自立		③再興途上
①回復	②奮闘中	

・回答者の現在の「くらしに対する姿勢」を表す３つの指標

この「自立（回復)」「自立（奮闘中)」「再興途上」の３つの「くらしに対する姿勢」の指標を用い、回答者の相対的な状態を定量的に把握することで以後の分析を行った。

⑵ 分析方法

個人の生活復興感に影響を与えるコミュニティに関する諸要因について個別に関係性を見てきたが、ここではそれらの要因が、全体として個々人の生活復興感を構成する生活満足度及び生活再適応感と、どのように関係しているかについて分析した。

検討した諸要因は、

ア　団地環境などコミュニティの外部要因と生活復興感

①団地環境、②住宅満足度、③移動距離・入居申込回数

イ　公的支援者や自治会等と生活復興感

①公的支援者、②自治会、③個人の自治会活動の認識や地域活動参加

ウ　近隣等の人間関係と生活復興感

①人との出会い、②個々人に対する見守り、③近所づきあい、④同居家族人数

エ　個々人の状況と生活復興感

①回答者年齢、②住宅被害、③家計状況

オ　くらしに対する姿勢

①「自立（回復・奮闘中)」、②「再興途上」

である。

これらはコミュニティに関する居住者個々人の回答から、団地環境や自治会など、居住者を取り巻く様々な要因までも網羅するものである。これらのさまざまな要因を組み合わせて生活復興感（生活満足度と生活再適応感）との関連性が最も高くなるものの組み合わせを分析したところ、統計的に有意な差のある 15 の要因を最終的に求めることができた。

⑶ 分析結果

表６－15、６－16 における「偏イータ２乗」の値が、各変数の説明力の大きさを示した数値である。この数値をもとに生活復興感指標（生活満足度と生活再適応感）に対して、それぞれの変数がどのような順序で説明力が強いのかを分析し、生活復興感に与える影響因子の特徴を示すこととする。

Ａ　自立（回復）▷　年齢と住宅被害▷　家計（収入・支出・預貯金）▷　住宅満足度▷　こころのストレス▷　重要他者との出会い、の順で生活満足度に影響を与えている

生活満足度を説明する要因として一番説明力を持つのは ①「自立（回復)」であった。現在の生活をすでに日常的なものと感じていることが、生活満足度を説明する上で一番大きな要因であることが明らかになった。次いで ②「回答者年齢と住宅被害」の説明力が強い。住宅の被害によらず 75 歳以上の回答者の満足度が高くなっているが、40 代・50 代では低くなっている。次に ③「家計」の収支や預貯金の増減の説明力が強かった。続いて、④「住宅満足度」、⑤「こころのストレス」が生活満足度に影響を与えていた。そして、⑥「重要他者との出会い」や ⑦「近所づきあい」といった「人とのつながり」に関する要因が説明力を持っている。

このように生活満足度に影響を与える要因として、まず「自立（回復)」、回答者年齢と住宅被害があり、その次にくらしむき、すまい、こころ、人とのつながりといった要素が関わっていることが今回の調査で明らかとなった。

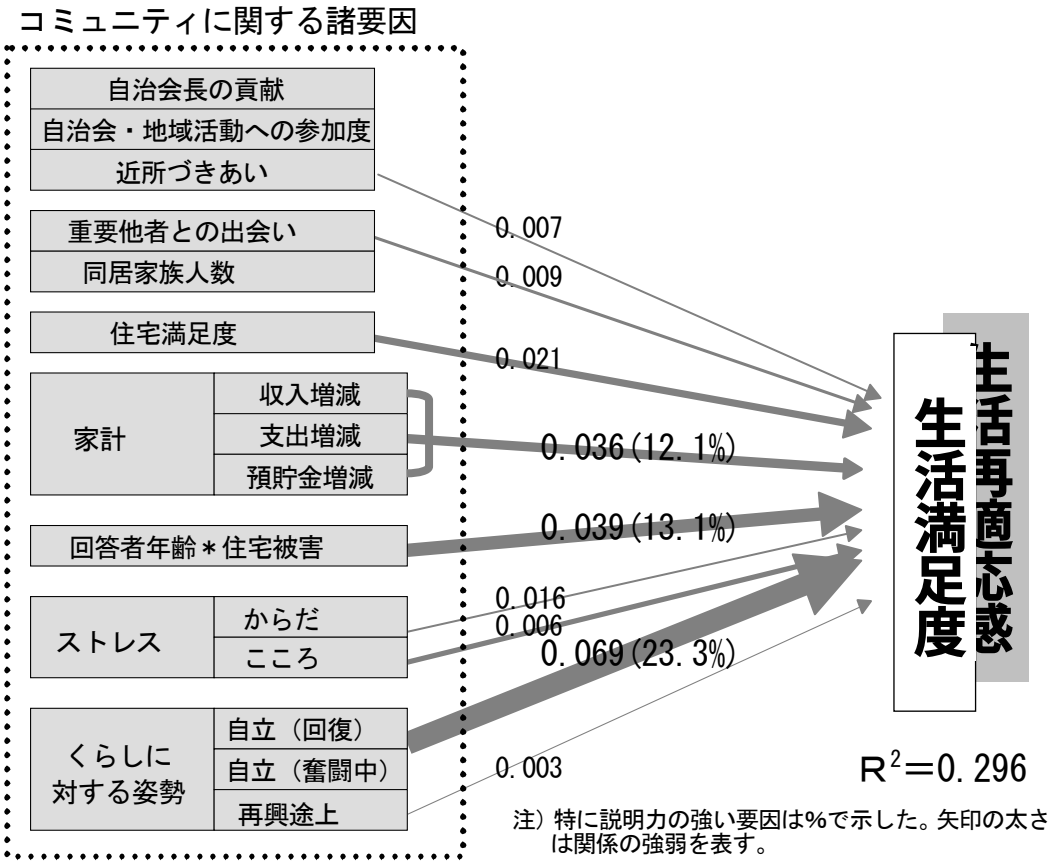


図６－19　　生活復興感（生活満足度）を従属変数とした多変量一般線型モデルの結果

表６－15　生活復興感（生活満足度）を従属変数とした多変量一般線型モデルの結果

A

	ﾀｲﾌﾟⅢ平方和	自由度	平均平方	F値	有意確率	偏ｲｰﾀ２乗	
修正モデル	1425.0	45	31.667	46.236	0.000	0.296	
切片	45.2	1	45.240	66.053	0.000	0.013	
回答者年齢＊住宅被害	136.3	24	5.680	8.293	0.000	0.039	②
自立（回復）	249.6	1	249.634	364.486	0.000	0.069	①
自立（奮闘中）	1.7	1	1.750	2.555	0.110	0.001	
再興途上	11.9	1	11.888	17.357	0.000	0.003	
からだのストレス	20.0	1	20.030	29.245	0.000	0.006	
こころのストレス	56.4	1	56.389	82.332	0.000	0.016	⑤
住宅満足度	73.0	1	72.991	106.573	0.000	0.021	④
自治会長の貢献	1.1	1	1.144	1.670	0.196	0.000	
自治会・地域活動への参加度	1.9	1	1.854	2.707	0.100	0.001	
近所づきあい度	22.9	1	22.926	33.474	0.000	0.007	⑦
重要他者との出会い	31.8	1	31.789	46.414	0.000	0.009	⑥
同居家族人数	1.9	5	0.373	0.544	0.743	0.001	
家計収支	39.3	2	19.642	28.679	0.000	0.011	
家計支出	33.1	2	16.529	24.134	0.000	0.010	③
家計預貯金	50.6	2	25.293	36.931	0.000	0.015	
誤差	3389.5	4949	0.685				
総和	4816.3	4995					
修正総和	4814.5	4994					

Ｒ２乗＝.296（調整済みＲ２乗＝.290）

注）この分析に際し、「回答者年齢＊住宅被害」「住宅満足度」「自治会・地域活動への参加度」「近所づきあい度」については、居住者調査の複数の回答結果を最適尺度法などの分析により以下のような１因子に統合したものを分析の指標とした。

・「回答者年齢＊住宅被害」：回答者の年齢が高いほど、また住宅の被害が大きいほど値が高くなる指標
・「住宅満足度」：住宅に満足しているほど値が高くなる指標
・「自治会・地域活動への参加度」：自治会や地域活動に参加しているほど値が高くなる指標
・「近所づきあい度」：近所づきあいに積極的なほど値が高くなる指標

B　年齢と住宅被害 ▷　自立(回復) ▷　重要他者との出会い ▷　自立（奮闘中）▷　近所づきあい、の順で生活再適応感に影響を与えている

生活再適応感とは、震災後の混乱がどの程度収まり、どれくらい新たな平衡が生活に戻り、将来についても安定した見通しが得られているのかを示す指標である。

これを説明する要因として強い説明力を持つものは、①「回答者年齢と住宅被害」と②「自立（回復)」、であった。ただし、回答者年齢は年齢が高くなるほど生活再適応感は低くなり、生活満足度とは異なっている。また被害が軽微な場合、どの年代でも同じような生活再適応感を示した。

この２要因以外では、生活満足度とは異なり、「回答者年齢と住宅被害」や「自立（回復)」とともに大きな説明力を持っていたのは ③「重要他者との出会い」であった。すなわち、家庭の外にいる重要他者との関係が、新たな生活への再適応では重要となることがうかがえた。震災から今までの間で、「自分の生き方を左右するような重要他者との出会い」が、新たな平衡状態の獲得のためには大変重要であることが確認されたのである。

次に説明力を持つ ④「自立（奮闘中)」は、自らの生活や活動に問題意識を持ち、コミュニティ活動にも参加しながら生活していることから生活再適応感が大きくなっていることが読みとれる。

さて、生活復興にとって核となる重要他者とのつながりは、実際にはどのようにして手に入れられるのだろうか。それはおそらく⑤「近所づきあい」や⑥「自治会や地域活動への参加」であると思われる。「近所づきあい」や「自治会や地域活動への参加」も、ある程度の経済的・精神的なゆとりがあって初めて目が向く、というのは被災者からよく聞くことであるが、今回の調査では、この点についても実証的な確認が得られた。

これらに次いで大きな説明力をもつのは ⑥「住宅満足度」や ⑥「こころのストレス」に関する要因であった。

また生活再適応感には「自治会長の貢献度」が関係している。自治会長の積極性は、自治会の活性化を通して、住民間に「近所づきあい」や「自治会や地域活動への参加」といった「人とのつながり」をつくりだすことにつながり、それが居住者の生活再適応感を高めることにつながっていると考えられる。

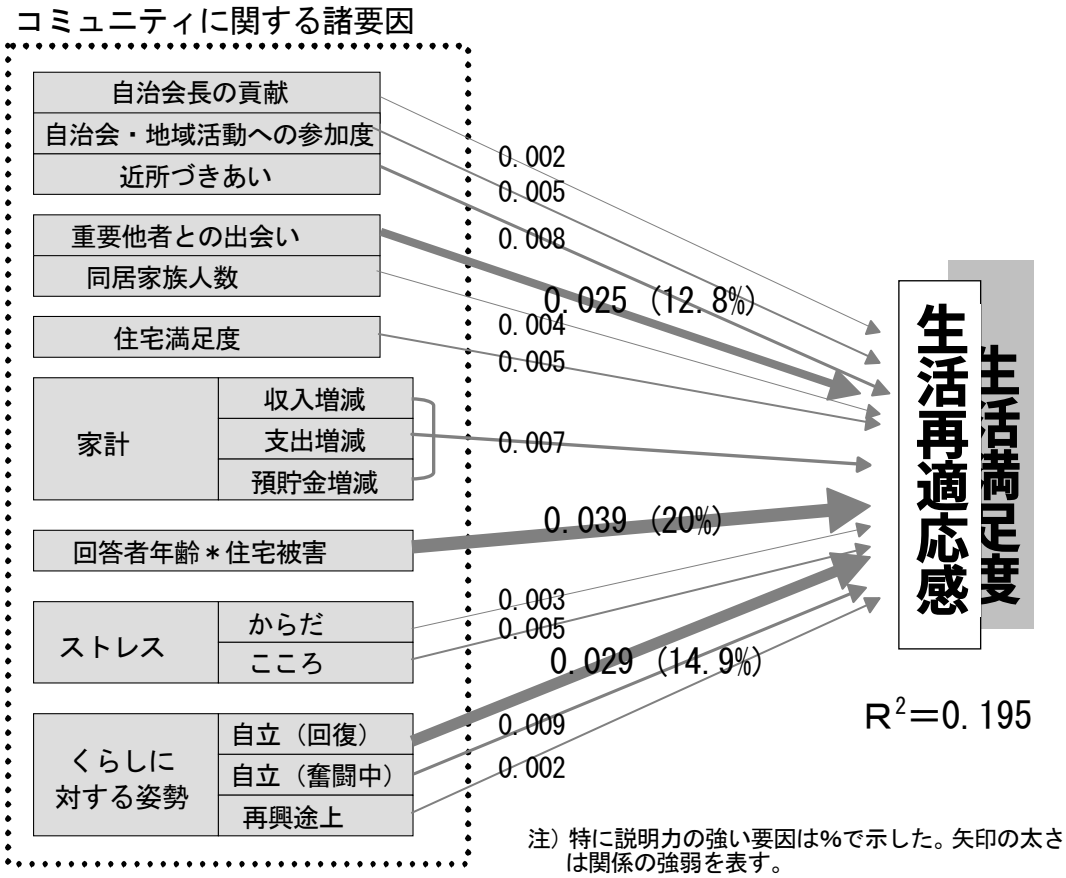


図６－20　　生活復興感（生活再適応感）を従属変数とした多変量一般線型モデルの結果

表６－16　生活復興感（生活再適応感）を従属変数とした多変量一般線型モデルの結果

B

	ﾀｲﾌﾟⅢ平方和	自由度	平均平方	F値	有意確率	偏ｲｰﾀ２乗
修正モデル	977.7	45	21.728	26.624	0.000	0.195
切片	34.7	1	34.708	42.529	0.000	0.009
回答者年齢＊住宅被害	162.4	24	6.768	8.293	0.000	0.039①
自立（回復）	121.0	1	120.959	148.216	0.000	0.029②
自立（奮闘中）	36.2	1	36.245	44.413	0.000	0.009④
再興途上	9.9	1	9.949	12.191	0.000	0.002
からだのストレス	10.8	1	10.768	13.194	0.000	0.003
こころのストレス	20.0	1	20.046	24.564	0.000	0.005⑥
住宅満足度	19.7	1	19.714	24.156	0.000	0.005⑥
自治会長の貢献	6.7	1	6.727	8.243	0.004	0.002
自治会・地域活動への参加度	20.3	1	20.276	24.845	0.000	0.005⑥
近所づきあい度	34.1	1	34.102	41.787	0.000	0.008⑤
重要他者との出会い	104.1	1	104.092	127.549	0.000	0.025③
同居家族人数	14.7	5	2.932	3.593	0.003	0.004
家計収支	16.1	2	8.044	9.856	0.000	0.004
家計支出	9.5	2	4.753	5.824	0.003	0.002
家計預貯金	4.9	2	2.462	3.016	0.049	0.001
誤差	4038.9	4949	0.816			
総和	5017.8	4995				
修正総和	5016.6	4994				

Ｒ２乗＝.195（調整済みＲ２乗＝.188）

注）表６－15 の注に同じ

３　被災者の自立とコミュニティの関係

前項での被災者個々人の生活復興感に影響を及ぼす諸要因の分析（第６章第２節２(3)参照）では、とくに被災者個人の感情である「くらしに対する姿勢」が大きな影響力を持っていることが示された。

ここでは、災害復興公営住宅居住者の「くらしに対する姿勢」が、被災者の自立やコミュニティにどのように影響を及ぼしているかを明らかにする。

(1)　「くらしに対する姿勢」の類型化

①「くらしに対する姿勢」の２つのタイプ

くらしに対する姿勢は、「自立」タイプが「再興途上」タイプを上回っている

居住者の現在の「くらしに対する姿勢」が被災者の自立やコミュニティにどのように影響を及ぼしているのか明らかにするため、「くらしに対する姿勢」の指標を用いて、それぞれの回答者ごとに「自立（回復)」「自立（奮闘中)」「再興途上」の度合いを定量的に求め、回答者のうち「自立（回復)」と「自立（奮闘中)」のいずれかの度合いが最大値をとっているものを「自立」タイプ、「再興途上」が最大値をとっているものを「再興途上」タイプと、２つのタイプに分け、このタイプを「くらしに対する姿勢」タイプと定義した。

このタイプ分けに関して、災害復興公営住宅居住者の特徴を明らかにするために、居住者調査の設問（問 18、19）の回答結果を、被災地全般の被災者を対象とした「2003 年生活復興調査（速報値)」の結果と比較した（図６－21)。

この結果を見ると、住まいの被害が大きかった災害復興公営住宅居住者である今回の調査対象者では「自立」タイプが 64.5%、「再興途上」タイプが 35.5%と、「自立」タイプが「再興途上」タイプを上回っている。しかし、被災地全般を対象とした「2003 年生活復興調査」（速報値）に比べ 12.4%「自立」タイプが少なかった。

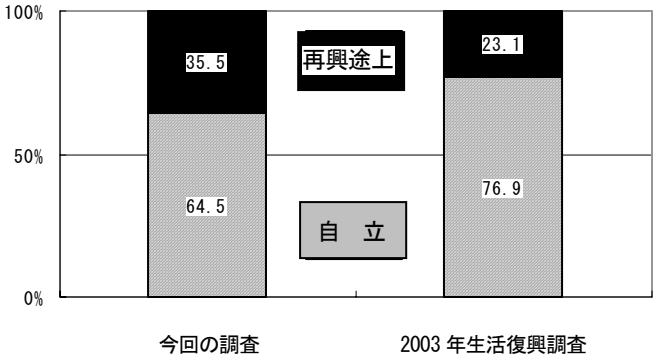


図６－21　「くらしに対する姿勢」タイプの比較

②タイプの特徴

「自立」タイプは、「再興途上」タイプに比べて生活復興感が高く、ストレスが低い

「くらしに対する姿勢」タイプと生活復興感指標との関係を分析したところ、統計的に有意な差が認められた。図６－22 に示すとおり、「自立」タイプの方が、生活満足度、生活再適応感のいずれもで高くなっており、また、からだのストレスやこころのストレスは小さくなっている。

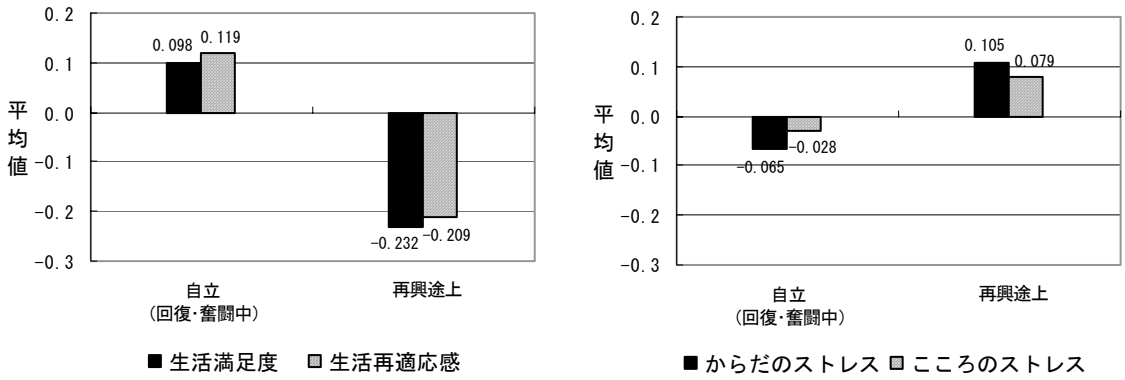


図６－22　「くらしに対する姿勢」タイプと生活復興感（左）（分散分析）
「くらしに対する姿勢」タイプとからだ・こころのストレス（左）（分散分析）

「自立」タイプは、自治会や地域活動への参加度が高い

「くらしに対する姿勢」タイプとコミュニティ参加度との関係を分析したところ、統計的に有意な差が認められた。図６－23 に示すとおり、「自立」タイプの方が、自治会・地域活動参加度と近所づきあい度のいずれもで高くなっており、コミュニティ活動に積極的であることがわかる。

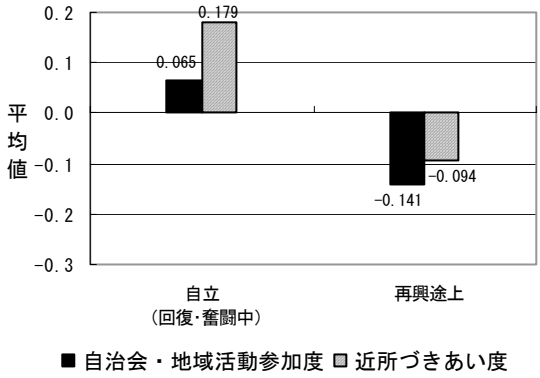


図６－23　「くらしに対する姿勢」タイプとコミュニティ参加

以上の分析から、それぞれの「くらしに対する姿勢」タイプの特徴をまとめると、以下のように定義できる。

・「自立」タイプ
生活満足度や再適応感が高く、くらしに対する姿勢が前向きで、新しい生活に向けてしっかりと踏み出しており、現在のくらしを「ふつう」に感じ、復興しているグループ。

・「再興途上」タイプ
生活満足度や再適応感が相対的に低く、新しい生活に向けて踏み出してはいるものの、将来の自分のあり方をまだ決めかね、再興の途上にあるグループ。

⑵「自立」タイプの分類

①「自立」タイプを構成する２つのタイプ

災害復興公営住宅居住者とそれ以外で、大きく異なるのは「自立」タイプの構成である

「自立」タイプは前述したように、「くらしに対する姿勢」の「自立（回復)」と「自立（奮闘中)」いずれかの度合いが最大値をとっているものである。

この「自立」タイプの分析を深めるため、「自立（回復)」と「自立（奮闘中)」の２つのグループに分類し、今回の調査結果と「2003 年生活復興調査（速報値)」の結果を比較したところ、図６－24 のようになった。すなわち、災害復興公営住宅居住者を対象とする今回の調査では、「自立（奮闘中)」が 17.1%高くなっており、「自立」タイプの構成が両調査では異なっていることがわかる。

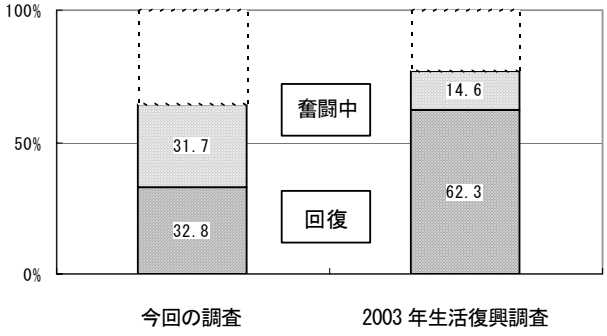


図６－24　「自立」タイプの構成の比較

②タイプの特徴

「自立（奮闘中)」タイプは、こころのストレスが高く、生活満足度も低いが、生活再適応感は高い

被災者の「くらしに対する姿勢」から分類された「自立」タイプの「回復」と「奮闘中」について、生活復興感との関係を分析したところ、統計的に有意な差が認められた。

すなわち、「自立（奮闘中)」タイプの生活満足度については、平均値（0.0）より低くなっているものの、生活再適応感については平均値を上回っている。また、こころのストレスは「再興途上」タイプより高いという結果であった（図６－25)。

これは、「自立（奮闘中)」タイプが、現在の状況に問題意識を抱きながらも、その解決に向け「震災体験には意義があった」と自ら意味づけの努力を行いながら生活しているために、こころのストレスは高いが、一方で生活再適応感は高まっていると読みとることができる。

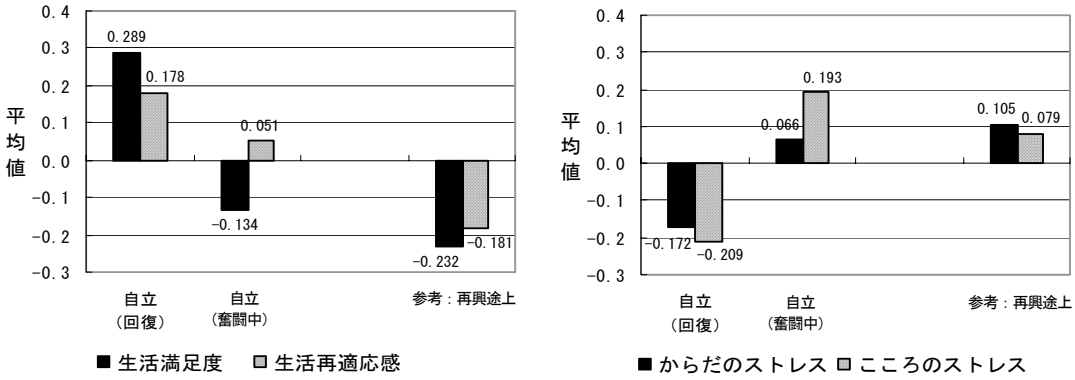


図６－25　「自立（回復)・自立（奮闘中)」と生活復興感　（分散分析）

「自立（奮闘中）」タイプは「自立（回復）」タイプと同程度、あるいはそれ以上に、コミュニティ活動に積極的に取り組んでおり、今後ともコミュニティ活動の担い手として期待できる

コミュニティに対する活動度について見ると、近所づきあい度は「自立（奮闘中）」タイプと「自立（回復）」タイプはほぼ同じであるが、自治会・地域活動では「自立（奮闘中）」タイプがやや高い。これは「自立（奮闘中）」タイプが、ストレスを抱えつつも「自立（回復）」タイプと同程度あるいはそれ以上に、災害復興公営住宅の近隣コミュニティや地域コミュニティにおける活動を行っていることを示している。さらに「自立（奮闘中）」タイプは、「自立（回復）」タイプに比べ現状に対する問題意識が高く、今後ともコミュニティ活動の担い手となっていくことが期待できる（図６－26）。

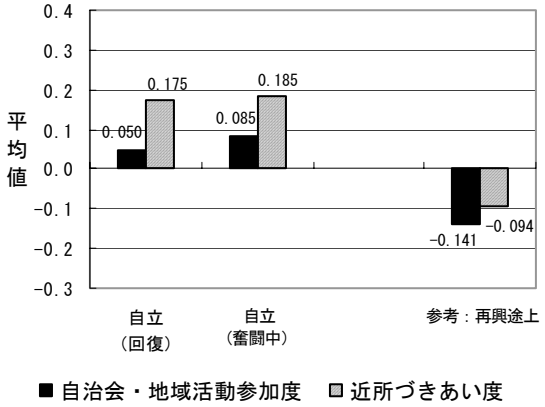


図６－26　「自立（回復）・自立（奮闘中）」とコミュニティ参加（分散分析）

40～70 代前半は「自立（奮闘中）」の割合が高く、コミュニティ活動に参加しながら生活回復に前向きに取り組んでいる層であるといえる

災害復興公営住宅居住者の「再興途上」タイプの割合は、各世代間を通じてほぼ同程度で、特別な違いは見られない

年代別に「くらしに対する姿勢」タイプを見ると、図６－27 のとおり、20 代・30 代の若年層及び 75 歳以上の高齢者は、「自立（回復）」タイプが高い割合となっている。「2003 年生活復興調査」と比較して見ると（図６－28）、20 代・30 代については同じ傾向だが、75 歳以上の「自立（回復）」タイプの割合が高いことは、災害復興公営住宅居住者の方だけの特徴である。この結果は、災害復興公営住宅において、さまざまな支援者が被災高齢者への見守り活動に取り組んできた結果、一定の効果をあげていることの表れと見ることができる。

一方で、40～70 代前半では自立タイプの「奮闘中」がやや高い割合となっている。すなわち、この年齢層はストレスを抱えながらもコミュニティ活動への参加度が高く、生活回復に前向きに取り組んでおり、今後のコミュニティ活動の中心的な担い手となっていくと思われる。

また、「再興途上」タイプの人は、各年代を通じてほぼ 35%前後であり、災害復興公営住宅居住者の中で見ると世代間でそれほど違いは表れていないことから、高齢者に対する見守り等を継続していくだけでなく、全世代共通でさらなる自立に向けた取り組みが求められてきているといえる。

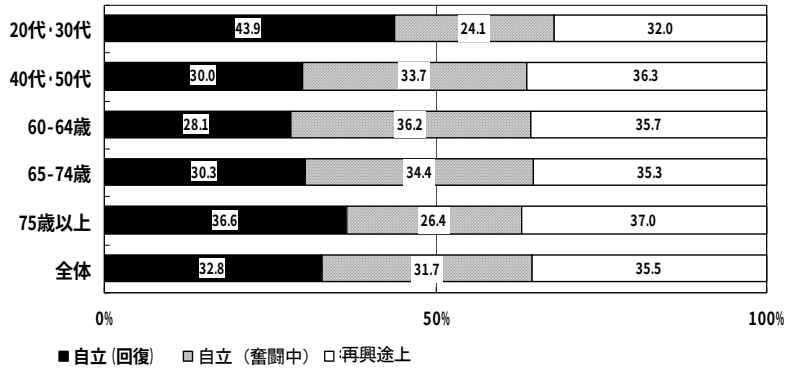


図６－27　年代別「くらしに対する姿勢」タイプの割合：今回の調査

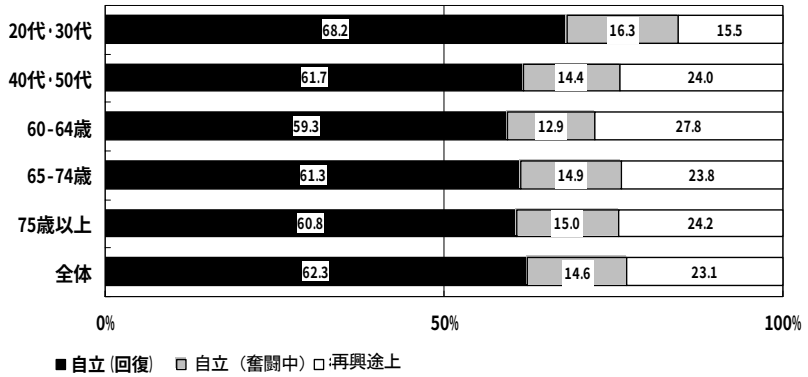


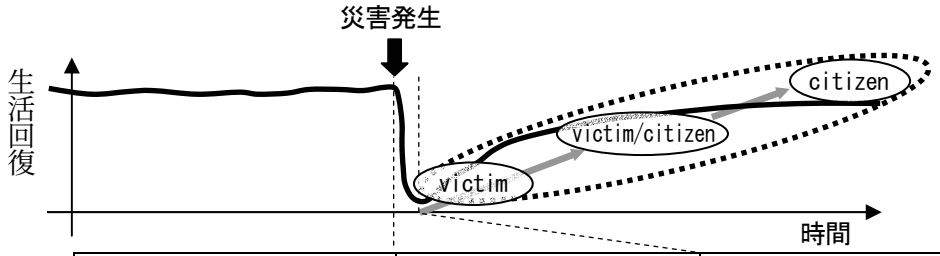
図６－28　年代別「くらしに対する姿勢」タイプの割合：2003 年生活復興調査

参　考

生活回復過程のイメージ

災害後の社会を人間行動の変化で捉えた分析によると、時間経過とともに①失見当期（震災当日）、②被災地社会の形成期（震災後２～４日）、③被災地社会の成立期（震災後２か月）、④生活復興期（震災後２か月以降）と移行し、個々人の被災者としての意識もまた時間経過と共に変化する。この過程は、被災地が復興する過程であるとともに、個々人が被災者であることを超えて再び日常の市民生活に戻っていく生活回復の過程である。

下の図は、縦軸に個々人の日々の生活回復をとり、横軸に時間をおいて、生活回復の過程を整理しモデル化したもので、災害前時点にあった日常生活が、災害によって被害を受け、その後徐々に回復する過程を表現している。



平常期	緊急対応期	復旧・復興期
通常の市民としての生活	①～10hr　失見当期 ②～100hr　被災地社会形成期 ③～1000hr　被災地社会成立期	1000hr～　生活復興

＜　個々人の生活復興過程モデル　＞

注）失見当期　　：震災の衝撃から強いストレスを受け、身体的精神的に変調をきたしている時期
被災地社会の形成期：震災によるダメージを理性的に受け止め、新しい現実が始まったことを理解する時期
被災地社会の成立期：震災による一時的な社会が完成し、人々がその中で活動する時期。被災社会の間でお互い助け合おうとする気持ちが共有され一種の幸福感が存在する時期であることから「災害ユートピア」の時期ともいわれる。

参考文献）林春男，震災後の居住地の変化とくらしの実情に関する調査，京都大学防災研究所、1999